

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02735

研究課題名(和文)キナウル語の現地調査：会話文例の収集と動詞形式の分析

研究課題名(英文)Field research on Kinnauri: collection of sentences in conversation and analysis of verb forms

研究代表者

高橋 慶治 (TAKAHASHI, Yoshiharu)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20252405

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：Covid19の流行によって2019年度末(2020年3月)の調査は実質的に不可能となった。その後、研究期間が延長されたが、実際には2020年度、2021年度の調査も海外渡航ができず実施できなかった。このため、この間は、これまで収集した資料の整理と分析のみを行った。ただし、整理によってさらに調査すべき項目が発見され、調査の準備を進めることにもなった。また、2019年度末と2020年度末にこれまでの成果の一部を論文としてまとめた。とくに、2020年度末には、キナウル語の簡易文法を論文としてまとめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、インド西北部のヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されているキナウル語の現地調査による資料収集と分析である。科学研究費補助金を給付された2017--2022年度は、とくに非定形の動詞が文末で果たす機能を明らかにするため、会話文を収集することを目指した。キナウル語はこれまで記述が少なく、本研究の研究代表者が20年余りにわたって研究を続けているものである。2020年度末に簡易文法としてこれまでの成果をまとめたが、記述できていない点がある。

研究成果の概要(英文)：The Covid19 epidemic made it virtually impossible to conduct the survey at the end of FY 2019 (March 2020). The study period was subsequently extended, but in fact the FY2020 and FY2021 surveys could not be conducted due to the inability to travel abroad. Therefore, during this period, I only analyzed the materials I had collected so far. The analysis uncovered items that should be further investigated. In addition, some of the results to date were compiled in the form of papers at the end of FY 2019 and FY 2020. In particular, at the end of FY2020, I wrote a grammatical manual of the Kinnauri language. In FY2022, since it was expected that overseas travel would be possible at the end of the fiscal year, preparations for a survey were made and a survey was conducted at the end of the fiscal year (in March, 2023). However, most of the time was spent only reexamining the deficiencies of the previous survey. Progress was made in being able to collect some examples of conversations.

研究分野：言語学

キーワード：チベット・ビルマ諸語 西ヒマラヤ諸語 キナウル語 現地調査 会話文例 動詞の形態変化

「研究成果報告内容」様式 C-19, F-19-1, Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 本研究は、1996年に開始された国際学術研究「チベット文化域におけるボン教文化の研究」で筆者がキナウル語現地調査を担当したことより始まる。チベット固有の宗教とされるボン教(ボン教)に繋がりがあある可能性のあるキナウル語の研究が進んでいなかったため、このプロジェクトで筆者が現地調査を行いキナウル語の記述を進めた。
- (2) キナウル語は、西ヒマラヤ諸語に属する言語の一つであり、インド西北部のヒマチャール・プラデシュ州キナウル地区で話されている。その特徴として、動詞形態論が複雑であること、能格的格表示、1次目的語と2次目的語の区別など、類型論的に興味深い現象を持っている。また、チベット・ビルマ諸語の比較研究の中では、「繋聯言語 link language」と呼ばれ、さまざまな言語をつなぐ特徴を持つと言われている。
- (3) なお、言語話者の人口は5万人程度であり、ヒンディー語の影響を受けて大きく変容しつつあると共に、言語が受け継がれなくなりつつあり、危機的な状況にあると言える。このような中でキナウル語の記述が急務とされる。
- (4) 筆者は、このプロジェクト終了後も現地調査による記述、分析を続け、その結果、2021年度末にキナウル語の簡易文法を論文としてまとめた。しかしながら、いまだ十分な分析ができていない点があり、本研究課題も含め、さらに深く調査、分析しなければならない。

2. 研究の目的

- (1) 本研究では、単文の研究から進んで、会話文を中心として収集し分析する予定であった。
- (2) キナウル語では、文末で、定形動詞に限らず非定形動詞が頻繁に用いられる。しかし、単文ではその使用状況について明確にならないと考え、会話文を収集することを考えた。
- (3) キナウル語の非定形動詞には、未完了形と完了形、動名詞形、遠過去形がある。この内、遠過去については、主語の人称表示がないだけで実質的に過去の意味を持つ形式と言えよう。しかし、それ以外の形式は、いずれも定形ではなく文末になりうるが、定形動詞の文末との違いは明らかではない。この違いを明らかにするためには単文の分析では不足している。その前後の文に統語的意味的にどのように関係するのかわからない。このため、研究範囲を単文から会話文に広げることにした。会話文では、さまざまな談話的特徴が現れ、その結果、非定形動詞と定形動詞の用法上の違いを明確にできると考える。

3. 研究の方法

- (1) 研究は、キナウル語が話されている地域での現地調査である。現地調査では、調査協力者に質問する形でさまざまな文を収集し、分析を行う。この場合、短い文を収集することになりがちである。
- (2) 筆者の研究では、通常、単文を収集する。母語話者の発話をノートに書き、さらに録音する。
- (3) 本研究では、母語話者同士の会話を録音し収集する予定であった。収集できた資料を調査協力者とともに文字化し、分析を行う。

4. 研究成果

- (1) Covid19の感染拡大により、現地調査ができず十分な資料を得られなかった。したがって、この科研費補助金の給付期間中は、主としてこれまでに収集した資料の整理、分析を行った。これにより、今後の調査、研究への新たなアイデアを得た。
- (2) この結果、上記のように簡易文法をまとめた。文法書としては簡潔にすぎる面もあるが、キナウル

語の文法現象について、できる限り網羅的に取り上げ記述した。また、これまで着手していながら完成していなかった動詞形態論の論文も執筆した。そこでは、本研究に関わる動詞の非定形についての分析も行った。

- (3) ただし、これまでの研究で複文がじゅうぶんに記述されていないことが明らかになったため、次の科研費申請にあたって複文の研究を主題とした。複文として、条件節、連体修飾節、副詞節、埋め込み文を扱う。それぞれ文法的に興味深い現象が現れる。それらは、本研究で果たせなかった会話文の分析とも関連することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takahashi, Yoshiharu	4. 巻 22
2. 論文標題 Non-finite forms of Kinnauri verbs: participle, gerund, and remote past	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Bulletin of the Graduate School of International Cultural Studies, Aichi Prefectural University	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi, Yoshiharu	4. 巻 4
2. 論文標題 A Grammatical Manual for the Kinnauri Language (Pangi Dialect)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 4: Link Languages and Archetypes in Tibeto-Burman	6. 最初と最後の頁 325-373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKAHASHI, Yoshiharu	4. 巻 52
2. 論文標題 Non-finite Forms of Kinnauri Verbs: Stems and Infinitives	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of the School of Foreign Studies, Aichi Prefectural University	6. 最初と最後の頁 261-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 慶治	4. 巻 2
2. 論文標題 キナウル語の使役表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シナ=チベット系諸言語の文法現象 2: 使役の諸相	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 TAKAHASHI, Yoshiharu
2. 発表標題 Non-finite forms of Kinnauri verbs: participle, gerund, and remote past
3. 学会等名 52nd International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshiharu Takahashi
2. 発表標題 Non-finite forms of Kinnauri verbs: stems and infinitives
3. 学会等名 51st International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------